

## 浄土を求めさせたもの — 『大無量寿経』を読む —

### 第109回 (2018.02.09) の要旨

拝読文(『真宗聖典』57頁)

身色・相好・功德・弁才、具足し莊嚴す。与に等しき者なし。無量の諸仏を恭敬し供養して常に諸仏のために共に称歎せらる。菩薩の諸波羅蜜を究竟し、空・無相・無願三昧、不生不滅もろもろの三昧門を修す。

\*\*\*\*\*

阿弥陀仏の本願の中、第二十二願の成就文というようなことから、『無量寿経』では第二十二願を受けて人間存在に与えられる大きな力が語られている。それが阿弥陀如来の願いによって浄土に生まれることがもつ大きな功德として「諸菩薩」ということが言われてきている。菩薩がもつ功德は、天親菩薩の『浄土論』で言うと、「二十九種莊嚴功德」として語られています。その中の「器世間」といわれる十七種の環境世界の如くに語る莊嚴功德が終わると、次に八種の仏功德が説かれて、その仏功德を受けて菩薩功德が開かれる。その菩薩功德の内容が、いうならば『無量寿経』のこの段の菩薩の内容と相応するのかなということを思わされます。

その天親菩薩の『浄土論』では、阿弥陀如来自身の功德が八種に開かれているのですが、その第八番目の功德が、いわゆる「不虛作住持功德」といわれている功德です。天親菩薩自身が不虛作住持功德と名づけておられます。空しくなすことが無いという。住持するという事は、住むという字に持つという字ですね。住持というのは、実は仏が、仏の功德を住持する。

その内容は仏の本願力を観ずるに、遇うて空しく過ぐるものは無いと(「観仏本願力 遇無空過者」)。「遇」というのは、遇うという字ですね。空しくというのは、「空」という字をむなしくと読みます。空しく過ぎる、空過する。空過するということは、努力して、あるいは願いをかけて、行為を蓄積してみても、結局その結果は無駄になるという。人間が仏に向かって努力したり、たとえ菩薩だとしても菩薩が仏を供養したり、衆生を教化したりしようとするのが、無駄になると。そういうことが、菩薩道にとっては大きな問題というか、折角やったのに無駄になったということほど辛いことはない。

努力するという事は大変だけれども、それに向かって努力するという事は、それが人間の意味を充実させてくれるなら喜んでやるということがあるわけです。しかし、どれだけやってもどうにも達成できなかったとか、時間が空しく過ぎたということほど辛いことはない。特に、菩薩道で仏になるということを目指して努力した場合に、それが色々な条件に恵まれずにたまたま途中で死んでしまうとか、自力の努力の場合であつたら努力の極限まで努力しますから、努力の極限までやって、健康で済むとは限らない。そういう場合は、無駄死になるわけです。無駄死にというようなことが、空しく時間が過ぎてしまったというようなことが、菩薩道、あるいは仏道と言われるものには起こりがちなのです。

それは他人には言えない。本人が背負って死ぬしかない。そういう無駄が、この仏道には幾らでも起こり得る。有限な能力しかない人間に無限を求めるような課題ですから。そういうことは、本当に悲しいというか、辛いというか、そういうことに対して阿弥陀如来は、阿弥陀如来の大悲は、空しく過ぐるものはないということに功德にした場所を開くのだと。こういうことがもつ懐の広さといいますか、空しく過ぎるものはないという功德を開くというのが「浄土」の意味でもあるし、阿弥陀如来自身の深い願いでもあるのだと。そういうことの大切さを曇鸞大師が気づいて、天親菩薩は不虛作住持功德というところに特別な意味を与えているのだと解説されています。

『無量寿経』の言葉、特に第二十二願に天親菩薩が出遇った。曇鸞大師もやはり、第十八願と第十一願と第二十二願という三願に注目した。曇鸞大師の仕事として、この三願は浄土に生まれさせようという第十八願が一つあればよいというのではなくて、浄土に生まれたら第十一願が成就する。第十一願というのは、「住正定聚」という言葉が入っているのですが、正定聚に住するという。そのことは、必

ず仏に成るということが確保されるのが正定聚という意味ですから、正定聚に住するという事は、必ず涅槃を得る。大般涅槃の覚りを開くことができる。そういうことが第十一願に語られて来るわけです。今読み進めております『無量寿経』には第十一願に、「必至滅度」、必ず滅度に至ると語られているのですが、これを異訳の經典では等正覚、正覚に等しい位に住して、大涅槃を証すると。こう言葉が変わっている。親鸞聖人は、それを「証大涅槃の願」だと。第十一願を「証大涅槃の願」だとご覧になった。

その第十一願によって、親鸞聖人は『教行信証』『証卷』を開いておられる。真実証、大涅槃を証するという事は、本願の中に語られているのだと。本願が語る第十一願というものに気づいたのは曇鸞大師です。曇鸞大師が『浄土論註』、天親菩薩の『浄土論』を註釈するなかで、最後の方に、天親菩薩が「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」と言っておられる。速やかに阿耨多羅三藐三菩提、つまり無上菩提を成就すると。「速やかに」という事は、天親菩薩がおいている言葉なのですが、そこに曇鸞大師はどうして速く、速やかにということが言えるのかということに、『無量寿経』の語ろうとする本願力、本願力に出遇うということがもっている大きな力がある。本願が語ろうとする言葉は、人間の側が努力したら往けるのではなくて、どんな人間であろうと仏力に触れたら仏法が成就する。そういうための本願力なのだ。そのことが先ずは浄土に往生させようとする力で、これが第十八願に誓われています。必ず浄土に往生することができるような存在にするのだというのが、第十八願の内容であると。

そしてそれも速やかに、その浄土の功德を衆生の上に成就する、大涅槃を与えるのだということが第十一願に誓われている。そして第二十二願は、大涅槃というのは、どういう内容かと言えば仏に成るといふことだと。仏になるということはどういうことかと言えば、仏は仏に成ってから大きなはたらきをするのだと。それは、仏は衆生を救うという仕事をしてこそ仏なのだ。衆生を救うというはたらきをしない仏というのはあり得ない。覚ったけれど衆生を救わないのであったら、それは阿羅漢です。そうではない、覚りを開いたら仏になる。仏に成るといふことは、衆生を救う仕事をするのだと。無限に仕事をし始めるのだと。こういうことが成り立つことが大涅槃だと。大乘仏教の大涅槃の内容は、一切の衆生を救わずんば止まんという願いが発ってくるのだと。死んでしまうのが涅槃ではないのだと。覚りを開いたら、一切衆生を救うのだと。こういうことが、大乘仏教の課題である。

阿弥陀如来の本願は、阿弥陀如来が仏であるということ、一切衆生を救い続けるのだと。そういう課題が本願である。これが第二十二願を通して、一切衆生が阿弥陀如来の本願力を引き受けて仏に成って、そして一切衆生を救わずんば止まんという願心を実践していくのだと。こういうのが第二十二願の内容なのだ。浄土に生まれたらもうそれでよいというものではないのだと。浄土に生まれるということ、大涅槃を証することである。大涅槃を証することは大菩薩となって本当に仏法の仕事をするようになるのだと。これが本願のはたらき、全部が阿弥陀如来自身のはたらきなのです。こういうように『無量寿経』は語っているわけです。

本願に触れるということ、阿弥陀如来の本願力をいただくことです。それは不慮作住持功德をいただくことだと。親鸞聖人は、本願力に遇うならば空しく過ぐるものはないということ、功德の宝海であると。功德の宝の海であるということ、本願力自身がはたらく力がそこに満ち満ちている。だから、「功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし」、煩惱の身であるということ、何の邪魔にもならないのだと。

我々からすると、このような煩惱の身ではとてもでないけれど、覚りが開けないところではない、開けないのはもちろんだけれども、仏法の仕事などできない、凡夫としての心で仏法に触れるというのは難しすぎると思ってしまう。そのような課題はとても嫌だというように逃げてしまう。しかしそこを「待てよ」と、そのような人間を「逃げさせないぞ」と。逃げるものを撰取するのが撰取不捨の大悲、本願なのだ。撰取不捨の大悲というものが、つまり、自分は逃げようとしたけれど、大悲によって逃げられなくなったと。大悲に見込まれてしまったのだと。もうどれだけ自分は愚かで罪が深かろうと本願の功德を伝えていこうと。こう立ち上がって親鸞聖人は、その後の一生を尽くして下さった。それは親鸞が、言うなら阿弥陀如来に見込まれたわけですね。実は救われるということは容易なことではない。

救われた途端に菩薩となつてはたらき出さなければならぬのだから、とても嫌だと凡夫は思いがちである。でもそうはいかんぞと。そう思つても逃がさんぞというのが阿弥陀如来の大悲なのだ。心光摂護、阿弥陀如来の大きなお心は、一切衆生にとりついて一切衆生を自分の国土の衆生にせざるばやまんと。

そういう形で、浄土に生まれたらいただける功德だと思つていたら、何のことはない、穢土に居ても浄土の功德が来るのだと。浄土の功德に触れる、阿弥陀の大悲の光に触れるのだと。我々がどれだけ暗い心でしようと、心が晴れるのだと。無駄なものはないのだと。自分は力は足りない、体力も足りない。だから駄目だと考えて落ち込んでいる人間に、「そうではないのだよ」と。どれだけお前に力が足りなくともわしが助けてやるのだと。こういう大悲が来る。「南無阿弥陀仏」といただくところに大きなはたらきを感じられて、「ああ、そうか、頑張る必要など全然ないのだ」と。このままで人生を尽くしていける、そういう眼が開けるのだと。こういうのが天親菩薩の出遇った不虛作住持功德という意味ですから、親鸞聖人は、そのことを和讃にされて、「煩惱の濁水へだてなし」、煩惱で濁った水を生きている。当たり前なのだ。それを隔てはしない。どのような濁りであろうと全部きれいな水に変えてしまうのだと。こういう功德に遇うのだというわけです。

私は本当にビックリするような言葉に出遇ったのですけれど、安田理深先生が亡くなる前に講義をしておられて、その時に語っておられる言葉の中に、これは安田先生の晩年の言葉だろうと思うのですが、浄土の功德に遇うということはどういうことかと。それは死んでから遇うのではない、凡夫であるということに、浄土の功德に遇えるのだと。だから、親鸞聖人は凡愚がこの不虛作住持功德に遇うのだと。『入出二門偈』で、「凡愚遇無空過者」と書いておられる。凡愚が遇うことができる。これは仮名聖教でも、何回も親鸞聖人はそういう解釈をしておられます。凡夫であることを妨げとせず本願力に遇うことができる。

その本願力に遇うことができるということが、人間の最後なのだ。浄土に生まれるということは、人間が死ぬことである。浄土に生まれることによって新しい命が与えられることである。それはどこで起こるかということ、「信の一念」である。「信の一念」において、人間に死ぬのだと。そして阿弥陀の力に甦るのだと。こういうようなことを安田先生はおっしゃっているのです。それが『無量寿経』が語ろうとする往生なのだ。往生するということは、死ぬことだと、一旦はそう言いながら、死ぬことと言うのは人間に死ぬことだと。そして本願力に甦る。本願力に遇うということは、人間の終わりなのだ。これが信心を得るといふことなのだ。

人間に諦めがつかないで我々はウロウロしている。諦めがつかないものだから本願力に帰することができない。人間の努力で何とかするのはないかと何時まででも思い続ける。そうすると死んでからでしか往けないということになるわけです。死んでからでしか往けないと考えてしまうのは、本願力を信じていない証拠なのだ。自力で往生できるのは、方便化身土である。自力が残っているのは死んだことにならない。だから、身が死んだ時に、身が死んで始めて方便化身土に往ける。そういう往生が本願の目的ではないのだと。本願が目的とするのは、この凡夫である。凡夫にこの功德を与えたい。そういうのが『無量寿経』が語ろうとする「南無阿弥陀仏」なのだ。それに出遇ったのが親鸞聖人である。こういうように安田先生は語って下さっているのです。すごい講義だなと思います。

本文に戻りますと、「身色・相好・功德・弁才、具足し莊嚴す」、この菩薩の身色も、相好も、…。相好というのは、相好功德という言葉があるのですが、相好というのは、相（おすがた）です。仏の相好という言葉がある。仏の相好というのは、仏の相（おすがた）、それは頭の毛は螺髪になっているとか、目が青いとか、舌はすごく大きいとか、そういう功德を相好というのです。これはみんな神話的なものなのです。ブツダの仕事がそういう形に表して、神話的な形にしているわけなんです。生きておられた釈迦如来がそのような姿でおられたはずがないのですが、手の長さは膝の下までいくとか、手にはアヒルのような水掻きがあるとか、そういうように語られるのが相好なのです。これは大悲の、如来が衆生を救いたいという願いを身の形にしたらこうなるということで、実際はもちろんそうではな

いのです。

功德というのは仏の功德ですが、功德という言葉も何か現代語にはなりにくいものです。仏法というか、仏法が生きている場合には、功德という言葉が日常語の中にはたらく言葉として使われていて、それが日常語になって更には世俗語になってしまうと功德という言葉が、何か単なる効果のような話になってしまう。本当の意味の功德ということが、何か世俗の言葉になってしまうわけです。ただ、世俗の言葉にたとえ了解されても、功德という言葉の本当の意味は一分は生きています。一分生きているのだけれどほとんど死んでしまっている。世俗の関心、つまり世間関心で仏教語を理解しようとしても、本当に難しいのです。

例えばこの功德という言葉は、英語で翻訳したらどういう言葉になるかという話で、そういう場合に二つ言葉がある。功德という言葉は、この世の勝ち負けを決定する力になるという面の言葉で翻訳するという場合には、英語ではmeritであると。仏教で功德という言葉は、この世の中の勝ち負けになるような言葉で翻訳してはまずいのではないかと。むしろ、存在がもっている徳としてのvirtueという言葉の方がふさわしいのではないかと。そういう問題が、鈴木大拙氏が『教行信証』を英訳した時に在ったそうです。この世の中でmeritになるということは、それで勝っていける力になるというわけです。demeritということは、そうでない場合は落ちこぼれるというわけでしょう。だから功德という言葉にはそういう面もあるわけです。世俗語になった功德にはですが、meritという言葉で翻訳されると、英語圏の人が英語で理解する限りにおいて、何か不純粋になってしまうと。仏の功德は、この世での勝ち負けの方向を決定するものではないはずだと。

meritという言葉は非常に人間が執着しやすい言葉だから、そうではない方がよいと。そこでvirtueという言葉がある。virtueという言葉は存在がもっている大きなはたらきのような面をいうわけです。英語のvirtueは日本人からすると何を言っているのかよく分からないようなところがあるわけですが、英語圏の人には分かる。仏教の功德は、そういう意味で分かり難いだけれど、目に見えない、目に見えないし表現ができないけれど、何か大きなものがあるということが功德という言葉で表現されている。

それで続いて「弁才」は、これは衆生を教化するための智慧です。衆生を教化するためには言葉が必要である。言葉が必要ですから、弁才無碍ということが言われていて、言葉が不自由なく出せる。ちゃんと言い当てたいということを言葉にして、言い当てることができる。そういう力が弁才という能力なのです。

そして、「空・無相・無願三昧、不生不滅もろもろの三昧門を修す」。三昧門というのは、止とか観とかという行をサマディー(samādhi)という。サマディー(samādhi)というのはインド語ですが、「定」と中国語に翻訳されるようなディヒャーナ(dhyāna)という言葉と重なる。これは精神統一という状態に入って、そしてフッとまた出てくる。そういう行が、インド文化の中によくあったそうです。そういうのをサマディーというのです。

とにかく三昧ということは、サマディー(samādhi)という言葉の翻訳語なのですが、精神集中によって意識がほとんど意識のはたらきではなくなるような状態。ある意味の神秘状態というか、神秘的体験というか、そういう状態に入る。それを真似するのが聖道門仏教です。真似をするけれど覚りにはいけない。覚りというのは、気づいた世界なのですが、定ということは気づくまでの方法論であることをお釈迦さまが何かにつけて教えているわけです。三昧を方法として取り入れなさいと。天親菩薩もそういう方法を取り入れて『浄土論』という論を作っている。作っているけれど、親鸞聖人がいただく時には、それは止観行の内容というよりも、止観行の行は、実は法蔵菩薩の行なのだ。法蔵菩薩の大悲がそういう形で教えて下さる莊嚴功德を我らに与えて下さるのだ。それは「南無阿彌陀仏」を通して与えられる。「南無阿彌陀仏」の内容を開いて、五念門として開いているのが天親菩薩だとも言えるわけです。こういうふうに親鸞は止観行の意味を解釈されたのです。本当に本願に触れて本願をいただくとうするとそういう解釈になるのは当然だと思います。

文責：中村 玲太（親鸞仏教センター嘱託研究員）